

大項目	2	持続可能な社会の実現に向けた地球的課題と国際協力			
中項目	2-1	生活文化の多様性と国際理解			
小項目	2-1-1	文化・人種・民族と現代社会			
細項目 (発問)	2-1-1-2	グローバル化時代の「文化」の多様性をどのように理解したら良いのでしょうか			
作成者名	杉本良男	作成・修正年	2017/2021/2023/2024	Ver.	1.3
キーワード	文化相対主義、人類学、フィールドワーク、ヨーロッパ中心主義				

発問の意図と説明

1. 文化の多様性を理解し、多様化する現代社会の生き方を考えよう

グローバル化が進む現代世界では、人、モノ、資本などあらゆる面で越境や流動化が急激に進み、文化の多様化も加速度的に拡大する反面、固有文化、伝統文化などを求める傾向も強くなっています。つまり、外に向かうグローバル化の反面、内に向かうナショナル化、ローカル化が進行しているのも現代世界の特徴だと言えます。ますます流動化し、多様化する「文化」をいかにとらえるかは、グローバル化にともなう人の移動の拡大によって多様化する人間社会そのものを、どのようにつくっていくのかを考える上での前提条件を考えることとなります。それは、異質な人びとと出会ったときに、どのような態度でのぞむのかを判断する材料を与えてくれるからです。多様化する文化をどのように生きるかについては、排除するのか包含するのか、大きく二つの立場がありますが、どちらをとっても、一つ間違えるとひどい差別につながる危険をはらんでいます。この節では、文化の多様性がどのようにとらえられてきたのかを振り返るとともに、ますます多様化する現代社会をどのように生きるかについて考える材料を示します。

2. 単一の種としてのヒトの多様性はどのように認識されるようになりましたか

ヒト（人類、*Homo sapiens*）は、約 20 万年前に東アフリカに出現した霊長類の一種だと考えられます。その後、5～6 万年前に出アフリカ（アフリカ大陸から他の大陸へ移動すること）を果たし、文化によって身を守りつつ、世界各地の多様な環境に適応していきました。生物進化のスケールに比べれば、きわめて短期間で世界の諸大陸に拡散した種であり、その過程で多様な文化を育みました。ヒトは、遺伝的には大きな変化をしないままに、急速な文化変化によって、世界の多様な環境へと適応したのです。アフリカのサバンナで狩猟採集生活をしていたヒトは、やがて植生も気候も異なる諸大陸の環境の中に、生業に関わる知識・技術・道具とともに入り込み、新しい環境利用のスタイルを発明していきました。つまり、ヒトの文化的多様性が、アフリカをはなれた新しい環境での種としての生存を可能にしたといえます。そしてまた、こうした文化的多様性こそが、異質な文化を持つ人びととの関係を複雑なものにする要因なのです。そして、人類の持つ多様な性格は、大航海時代を経ることで大きく変わっていきました。

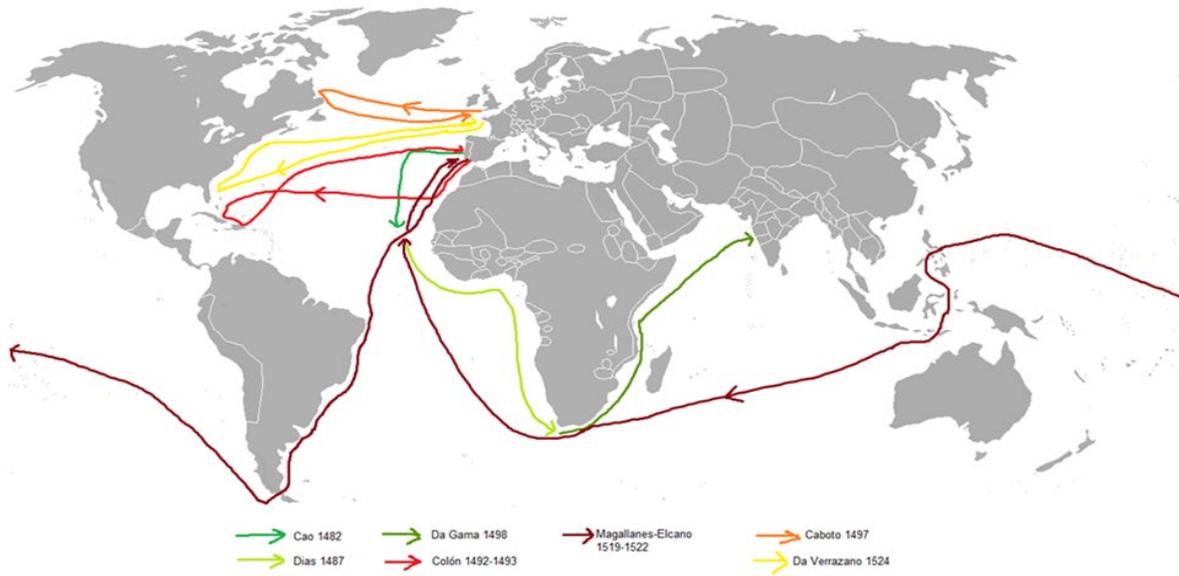
15 世紀末からのいわゆる大航海時代の到来は、それまで想像、空想の世界でしかなかった未知の大陸、アメリカ、アジア、アフリカ、などについての具体的な情報をもたらすことになりました。ヨーロッパを脅かすイスラム教徒（ムスリム）の影響を排除して世界制覇をめざしたカトリック国、スペインとポルトガルにとっては、対外交渉を有利に進めるために奴隷が重要な交換資源でした。コロンブス以後アメリカ大陸に入ったスペイン人などは、現地の人びとが自分たちキリスト教徒と同じ人類なのか否かについて激しい議論を闘わせました。そして、現地の人びとはヨーロッパ人とは起源から異なっているのだから奴隷化しても差し支えないという極端な立場をとる人類複数起源説もあらわれました。文化の多様性、異質性の認識は、征服する側とされる側との力関係を背景とする、優者と劣者との関係に転じていったのです（図 1）。

3. 序列的な文化観はどのような経緯で「発明」されたのでしょうか

世界には多様な人間がおり、それぞれが文化の多様性をそなえていることは、たとえばギリシアのヘーロドトスの記述にもあらわれるように、古くから指摘されていました。しかし、近代ヨーロッパ世界がつくりだした序列的な文化観は、文化の進化の度合いを、いくつかの規準によって図ろうとする自己中心的な考え方でした。

産業革命を経た近代ヨーロッパ世界で構築されたのは、ヨーロッパ文化を最高の段階（文明）、狩猟採集文化を最低の段階（野蛮）、その他の生業文化をその中間の段階（未開）と位置づける、きわめてヨーロッパ中心主

図表のページ



By Continentalis (Unknown) [CC BY-SA 3.0 (<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>)] via Wikimedia Commons(<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Explos.png>)

図1 大航海時代に開発された航路

<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Explos.png>

義的かつ序列的な文化観でありました。こうして、多様な自然環境への適応の方法であった文化の多様性は、ヨーロッパ中心のスケールのどこかに位置づけられました。文化的な多様性を、「進んでいる／遅れている」「新しい／古い」、「優れている／劣っている」などと、直線的な時系列に沿って序列化してとらえる考え方は、今も私たちの中に根強く残っており、それが時に暴走してヘイト・スピーチなどにつながっていくのです。しかし、ヨーロッパ世界は帝国主義的な植民地化に批判的な人びとから、こうした進化主義的で普遍主義的な文化理解を根本から批判する動きが出てきます。

4. 文化相対主義は正解なのでしょうか

20世紀に入って、植民地支配が本格化し、また現地調査によって実証的かつ緻密な異文化の研究が盛んになることで、あらゆる文化を共通の規準によって序列をつけるようなヨーロッパ中心主義が批判されました。そして、個別の文化にはそれぞれの独自性があり、優劣をつけられるものではなく、対等に扱われなければならないという「文化相対主義」の立場がとられるようになりました。これはとくに文化人類学の基本的な方法、倫理として定着しただけでなく、一般社会におけるひとつの常識としても定着するようになりました。それは企業文化の理解が必要だ、などと経済界にも採用され、文化の違いは絶対的だというような逆転の発想にもなりました。

こうして、「文化」の概念は様々なひろがりをもつようになりました。主体となるのは、かつてのような「未開の民族集団」に限定されず、広く、都市、学校などのさまざまな組織をはじめ、耳の聞こえない手話言語集団（ろう者コミュニティ）、特定の年齢層の集団（子どもたちや高齢者たち）など、いたるところに文化を見出し、序列化することなく対等の立場で記述するという成果を生み出してきました。しかし物事にはつねに裏表があるもので、こうした異文化、他文化を尊重する文化相対主義には、文化の違いを絶対化して、互いに理解することが著しく困難だという極端な不可知論を生み出す原因にもなりました。そこでは文化が違っているからあの人たちは理解できない、と言うような態度につながり、再び文化摩擦や差別を生む原因にもなりました。文化相対主義は〇〇人、〇〇文化はこうだから仕方がない、というような決めつけを正当化する根拠にもなったのです。

5. 文化の流動性、多様性を認識することの意義は何でしょう

文化に関して固定的で静的なとらえ方に立つと、基層文化、伝統文化などという理想化された、しかしあくまでも架空の文化が想定されて、互いの違いばかりが強調される危険があります。しかし、現在では実際文化は多様性を含んでおり、またつねに動的に創られ、再創造されるものだというとらえ方が一般化してきます。人間の文化は動的・可変的であって、文化は常に新たに創られ、混ざり、変容していくものだと考えるのです。このような考え方に立つと、文化およびそれを営む人びとを、永続的に固定した存在と見なす、いわゆる「本質主義」の立場は、むしろ批判の対象となってきます。つまり、人間とは「たえず各所で文化を創り続ける生き物」なのだと言うことができます。私たちが、多文化の共生、共存のテーマを考える際も、「お互いに変わりようのない異質なものどうしの共存」というモデルを超えて、文化の可変性に着目した検討が必要だと考えます。

このような流動し、変貌する「文化」の実態をとらえるには、自文化であれ、多文化であれ、異文化であれ、じっさいに人びとが文化の中に生きているすがたにふれて、その意味を考える必要があります。そのためにも、地表面のあらゆる現象を対象とする地理学における「巡検」や、人間社会の個別文化を研究対象とする文化人類学の「現地調査」つまり、「フィールドワーク」が重要な方法論なのです。とくに、地図や景観から入る地理学的フィールドワークの方法と、現場の人びとの生活に深く分け入って情報を集める人類学的フィールドワークの方法を組み合わせ、つねに大局に立ち戻りながら、人びとの具体的な生活の実情を調査することがもとめられているのです。

参考文献

- 日本文化人類学会（監修）鏡味 治也、根 康正、橋本 和也、森山 工（編）『フィールドワーカーズ・ハンドブック』世界思想社、2011
- 奥野克巳・花浜馨也編『文化人類学のレッスン-フィールドからの出発』学陽書房、2005.
- 日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善出版、2009.
- 武田丈・亀井伸孝編『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社、2008.
- 奥野克巳・花浜馨也編、『文化人類学のレッスン-フィールドからの出発』，学陽書房、2005.